

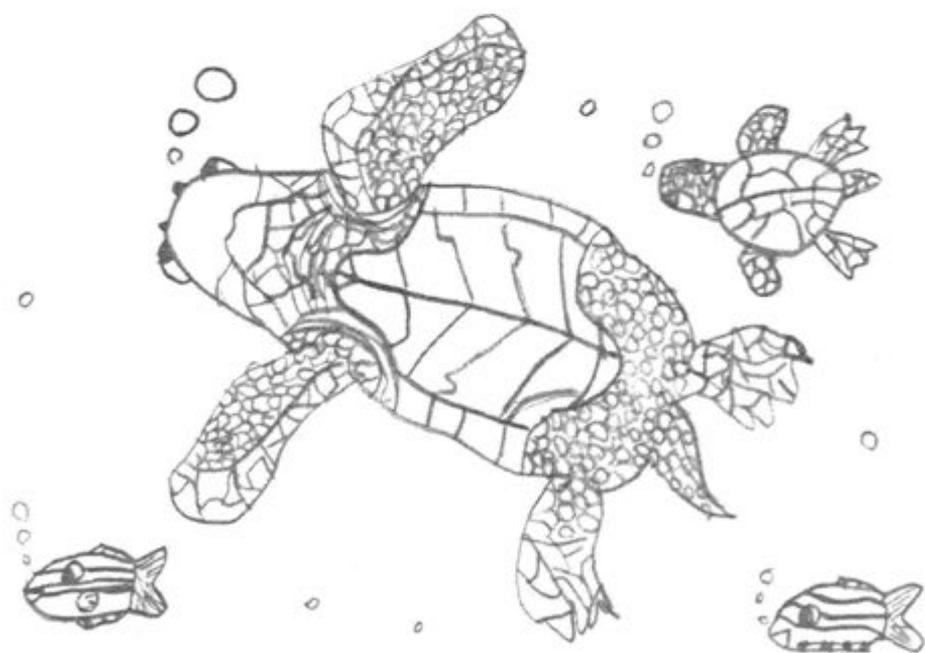


Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第10号



表紙の絵



兵庫県にお住まいの、小学校2年生、池田希さんが描いてくださいました。池田さんはマリンタートラ表紙の絵募集の記事を見て、姫路水族館まで足を運び、水槽の前で熱心に描いてくださったそうです。表紙の絵と一緒に、折り紙で作ったカメも送っていただきました。素敵な絵をありがとうございました。

表紙の絵を募集しています。

引き続き、皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなもので構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度騙されたと思って描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。（仕上がりはモノクロになります。）
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、6月末までをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリンタートラ編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリンタートラ表紙」と入れてお送り下さい。

会報の名称マリン・タートラ（Marine Turtler）は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートラと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine
Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 9

「上陸のタイミングと潮汐」 松沢慶将・・・3

マリントートルー列伝

「太田 英利さん」 亀崎直樹・・・5

ウミガメと考古学

「ウミガメの銅鐸」 富岡直人・・・6

マリントートルー10号突破企画
日本ウミガメ協議会、調査基地の紹介

黒島研究所とウミガメ研究

亀田和成・・・7

室戸基地とウミガメ研究

山崎千亜希・・・9

事務局より

第17回日本ウミガメ会議の報告・・・11

リバイブウミガメ戦略会議の報告・・・12

「インターネットショッピングがウミガメを救う？」

「グッズ紹介と、グッズ取扱店の募集」

「協議会オリジナルデザインのクレジットカード」

「事務局の主な動き」

「会計報告」

「寄付をいただいた方」

「編集後記」

ウミガメ基礎講座9

「上陸のタイミングと潮汐」

松沢慶将

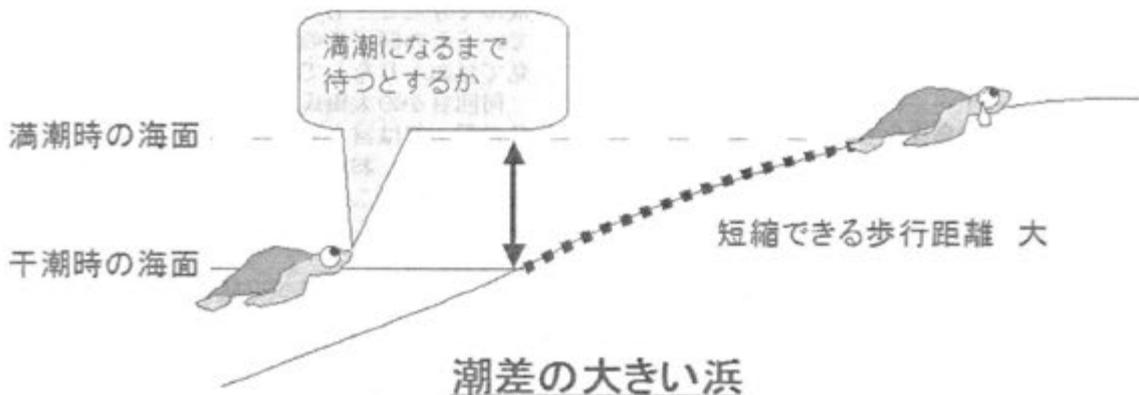
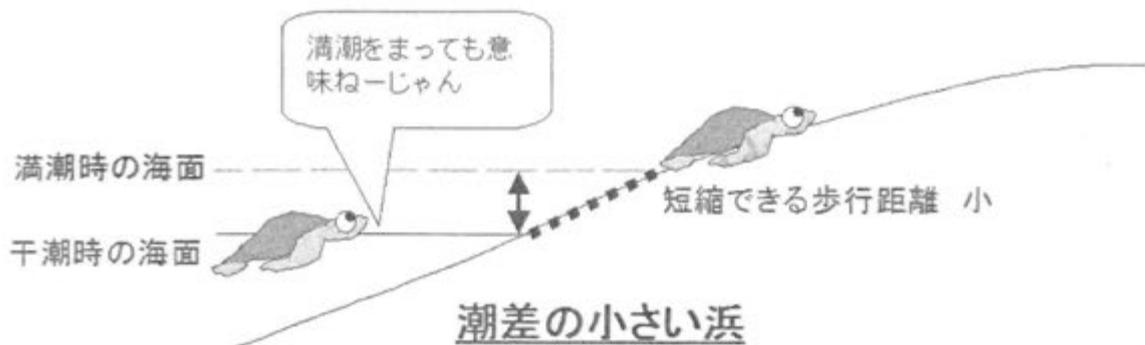
海面の高さはほぼ半日または1日周期で、上がったり下がったりしています。このような海面の鉛直運動は、月や太陽による引力と地球にはたらく遠心力の合力によって引き起こされ、「潮汐」と呼ばれます。内陸で生活していると潮汐を意識する機会は滅多にありませんが、磯に暮らす生物は、潮が満ちれば海中に、引けば空中にと、生活環境がガラリと変化するので、その影響は測り知れません。産卵行動を潮汐に同調させている動物も少なくなく、例えば、クサフグやカブトガニは大潮の満潮にあわせて産卵することが知られています。ウミガメの産卵についても、「満潮にあわせて上陸してくる」との話を各地で特に漁師さんから頻りに聞くのですが、今回はこれについて考えてみましょう。

ウミガメが水中にいる間は浮力がはたらき浮いているので、水平移動（遊泳）には、それほど労力が要りません。しかし、砂浜に上陸すると、体を引きずらなければならなくなり、砂との摩擦が大きな負担になってしまいます。多くの場合、メスは、卵が波を被ったり流されたりしないように植生帯の際まで進んで産卵します。しかも、潮が引いていようが満ちていようが目指す地点は同じです。それで、満潮にあわせて上陸すれば陸上移動にかかる負担を軽減できるから、メスにとっては得策というわけです。漁

港が整備されるまで各地の漁村では、大変に苦勞をしていちいち舟を浜であげおろししていましたから、浜に上陸してくるウミガメを見て漁師さん達がそのように考えたのはなるほどものともな話ですし、本当にそうなのかもしれません。

しかし、上陸のタイミングと潮汐の関係を調べてみると、満潮の頃に上陸が多くなる場合もあるのですが、そうならない地域が多く、研究者の間でも暫く意見が定まりませんでした。では、なぜそうなるのでしょうか？

最大のポイントは、潮差（満潮時と干潮時の水位差）の地域差です。潮差は地域によっても大きく異なるもので、例えば、閉鎖性の強い日本海の沿岸では潮差は0.3m程度ですが、カナダ東部のファンディ湾の奥では、潮差が最大20m、平均でも13mになります。砂浜の傾斜が同じであれば、潮差が大きい浜では満潮にあわせて上陸することで砂浜を歩く距離を大幅に減らすことができますが、潮差が小さい浜では満潮に上陸してもさほどメリットがないということになるのです。そして、実際に、米国で平均潮差が2.0mの浜と1.1m程度の浜で調べてみたところ、前者では確かに満潮にあわせて上陸する傾向がみられたのですが、後者では干潮満潮で上陸回数に差は見られませんでした。



さて、翻って日本はどうでしょうか？ウミガメの産卵が多い太平洋側における平均潮差は1.0~1.5mと少し小さめです。しかも、1日2回起こる干潮での潮の引き具合が異なる傾向が強く、産卵期にあたる夏の間は、夜間は昼間の半分程度しか潮が引きません。つまり、ウミガメが上陸する時間帯に生じる潮位変化は、先に示した平均潮差よりもっとずっと小さいのです。また、全体的に大陸の浜に比べて砂が粗く、

傾斜は急になりますから、満潮に上陸することで省くことの出来る距離は比較的に短くなります。このようなことを考慮すると、どうも、日本の砂浜では、ウミガメが潮汐にあわせて上陸しても大した得にはならないようです。それでも、やはり満潮に合わせて上陸してくるウミガメが多いのだとするならば、それは日本のウミガメはよほどのドケチということなのでしょう。

本文では、上陸のタイミングに及ぼす潮汐の影響については否定的な見解を述べました。しかし、南西諸島ではリーフが発達して潮が引けば物理的に砂浜へのアクセスが不可能となるケースもあり、そのような場合については潮汐と上陸が同調しやすくなります。また、九州西部では比較的に潮差が大きいことから、上陸と潮汐が同調しやすくと予想されます。

マリンタートル列伝 「太田 英利さん」

亀崎直樹

私は27から30歳になるまで、八重山諸島、黒島にある八重山海中公園研究所の研究員をしていました。当時はまだ八重山も遠いところで、自然も多く残っていました。そんな自然を研究したいという若者が多く訪ねてきましたが、当時、野外で生物研究を目指すのは変人であり、それなりの覚悟のある若者が多かったような気がします。

以前このコーナーで紹介した当会理事の平手康市さんや研究員の島達也もそのような変人であった訳です。そのような若者の中で太田英利氏（現在、琉球大学熱帯生物圏研究センター教授）はいろんな面で傑出していたのです。

私はヘビが嫌いです。理由はわかりません。本能というか、遺伝的というか、とにかくヘビが出ると体がすくむのです。ヘビの出現で、女房をおいて逃げたり、自分の子供を川に突き落として逃げたりしたこともありました。大学時代は本から切り抜いたヘビの写真を下宿に貼り付け、耐性を付けようと努力したのですが、睡眠不足に陥ったうえに、さらに過剰に反応するようになったのでした。

京都大学の学生だった太田氏は春になると、汚いリュックを背負って、北の方から黒島に渡ってきました。初めて島に来たときでした。赤瓦の当時の借家の裏座に彼を泊めました。例のごとく泡盛をこたま飲んだところで、彼のリュックが微妙に動いていることに気づきました。「太田君、何かリュック、動いてるで・・・」

「あっ、ヘビです。」
「ガアーーーーン。何、ヘビ??? はやく出してくれえええ。」

彼はげんそうな顔をして、リュックの口を開けると、中からおびたじい教の洗濯ネットが……。中には、硬いというか、軟らかいというか、あの独特の雰囲気のあるひよろ長い動物が、しかも元気に入っているのです。

私が住んでいた家の回りには石垣がありました。そこにサキシマハブやサキシママダラ（もちろん

ヘビの1種）が生息していることは、なんとなく予想していました。たまに自宅の前でひき殺されたハブの死体が転がっていることもありましたが、機械で草を刈っていたら、ハブの首が飛んできたこともありました。私は石垣に棲んでいるその同居者の存在が気になるのですが、見て見ぬふりをしていました。

何回目かの太田氏の来島の時です。島を出る日の朝、彼は言うのです。

「亀崎さん、お世話になりました。何か最後に手伝っていくことはありませんか？」

特に手伝ってもらうような仕事がなかったので、半分、冗談で

「おう、家の石垣にヘビがおると思うから、駆除していってくれや・・・。」

彼はうれしそうな顔してさっそく石垣を探索し始めました。午前中、彼は石垣を巡ってうろうろしていました。そして船の時間が。

「亀崎さん。いやあ、残念でした。サキシマハブの大きな奴がおって、頭は見えるんですが、捕れませんでしたわ。ワッハハ。」

そして彼は去っていったのでした。それ以来、石垣を見る度にその時の太田氏の笑顔と石垣に潜むヘビが脳裏に浮かぶようになったのです。

その後、太田氏の勧めで京大に行って、現在の私があるわけですから、やはりヘビは縁起のいい動物なのかもしれません。



アカマダラを操る太田氏

ウミガメと考古学

-ウミガメの銅鐸-

富岡直人

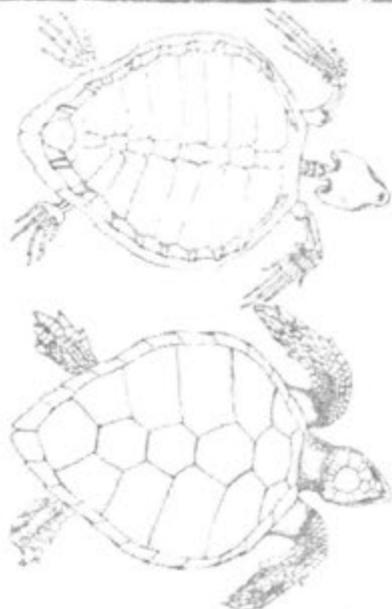
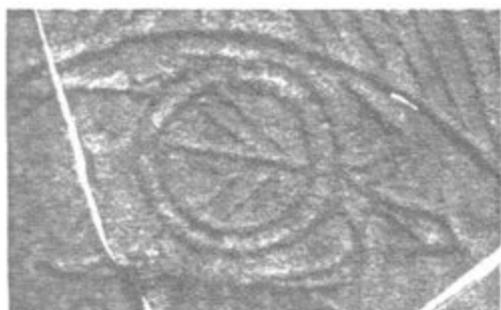
ここに紹介するウミガメの図(右上)は、弥生時代に作られた「銅鐸」の吊り手の部分にあったものです。約2000年前、近畿を中心とする弥生人は銅に錫を加えた合金である青銅を使ってこのような銅鐸を製作し、稲の豊作の祭りをおこなっていたと考えられています。

このウミガメが描かれた銅鐸は、考古学者によって「加茂岩倉遺跡10号鐸」と命名されたもので、島根県雲南市から出土した重要文化財の一つです。この銅鐸が発見される以前は、銅鐸に描かれるカメ類は、スッポンと考えられるものが多かったのですが、明らかにウミガメと考えられるこの図は貴重な例として考古学者から注目されました。このウミガメの表現は、甲羅の周辺には輪郭を縁取る表現があることから、ウミガメ類の中でもタイマイ、アオウミガメ、アカウミガメを含むウミガメ科の仲間と推定されます。

また、尾が表現されていないので、メスの可能性が高いと私は考えていますが、皆様はどう考えますか？ メスである可能性が高いと考えるもう一つの理由は、陸上で人間とウミガメが出会う確率の高いのは、産卵をするメスだからです。

この銅鐸と類似したタイプの銅鐸は島根のみならず大阪府、徳島県、淡路島で見つかっています。この銅鐸の製作地も、近畿地方の可能性がありますが、ただし、これらの地域から出土している銅鐸にウミガメが表現されているのは見つかりません。当時は、縄文時代の最晩期が終了して3000年ほどが過ぎ、現在と同じ程度の平均気温になっていたと考えられます。そのため、これら地域の沿岸部にはアカウミガメが産卵に来ていたものと考えられます。そのため、この画像を見たならば、この地域の弥生人はアカウミガメの産卵を思い浮かべたことでしょう。特に海岸付近に住んでいた弥生人たちなら、きっと何回もアカウミガメの産卵を目にすることが出来たはずですよ。

ただし、アカウミガメにしては頭が小さめであること、アカウミガメの甲羅がやや楕円なのに対して図像が正円形で示されている点がやや気になります。皆さんはどう思われますか？



銅鐸に描かれたウミガメらしき絵と
アカウミガメの外部形態と骨格

参考までにアカウミガメの骨格の図を中段、アカウミガメの図を下段に示しておきます。(私の研究室の学生さんは「タイマイ」「アオウミガメ」あるいは「子ガメ」の可能性も考えています。)

銅鐸文化が展開した本州中～南部でウミガメが産卵するのは、5月から8月です。この時期は弥生人にとって大事な水稻がスクスクと育つ季節ですね。稲の育つ季節に沢山の卵を産むウミガメの生命力にあやかるため、弥生人はこの図を表現したのかも知れません

日本ウミガメ協議会付属 黒島研究所（旧八重山海中公園研究所） とウミガメ

亀田和成

1962年、北米シアトルで第一回世界国立公園会議が開かれ、各国に海中公園の設定が勧告されました。当時は、急激な近代化による環境破壊が深刻な問題になってきており、その問題は陸地だけではなく、海中へも広がっていきました。そんな中、日本では海中景観を守り、その資源をレクリエーション、教育、観光、そして学術研究の場として提供しようという運動が起こりました。海中公園センターは学者、実業家、観光業界などの多くの有志によって設立されたのです。

そして日本各地に海中公園（自然を保護し、有効利用すべき場所）を設定し、活動の拠点として研究施設を建てました。八重山海中公園研究所もその一つで、1975年に沖縄県竹富町黒島に設立されました。当時は、八重山諸島で唯一の海洋研究施設でもあり、多くの業績を残してきました。なかでも石西礁湖（石垣島と西表島の間のサンゴ礁海域）のサンゴ調査とウミガメ類の産卵調査は特記すべきものです。また研究員が数年ごとに交替したため、研究員の専門ごとに様々な生物の研究がおこなわれました。また、研究で明らかになったことを一般の人々へ伝えるため、多くのイベントを開き、研究所内に展示場所を設け、公開していることも大きな特徴といえます。



黒島研究所内の展示室



飼育中の子ガメ



「黒島研究所」の外観

2001年、海中公園センターの解散と資金を捻出していた名古屋鉄道の撤退により、八重山海中公園研究所は閉鎖されることになりました。しかし30年近く続いた当研究所を閉鎖するのは、あまりに勿体ないことです。存続を求める意見が多く出されたことから、土地を所有する上地グループのご厚意の下、日本ウミガメ協議会が運営を引き継ぎ、名称を黒島研究所に変更し活動を続けています。

ウミガメの研究

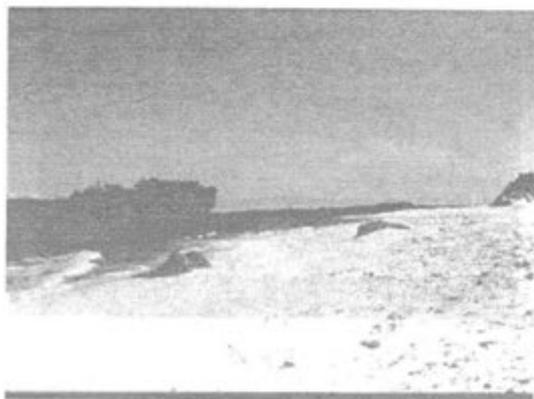
当研究所におけるウミガメ研究といえば、第一に黒島の北西にある西の浜の上陸・産卵のモニタリング調査があげられます。この調査は1978年、当時の研究員であった御前洋氏により毎日のように西の浜を歩き、ウミガメの上陸・産卵の跡を探すというものから始まりました。次に着任した宮脇逸郎氏により、体系的な方法が確立され、その後も現在までの28年間、歴代の研究員の努力により調査が継続されてきました。西の浜のモニタリング調査は今年で29年目を迎えるのです。これほど長いモニタリング調査が行われているのは、南西諸島では、黒島の西の浜だけです。

他にも、人工飼料による子ガメの成長速度の違い、タイマイの餌であるカイメンの調査など、数え切れないほどの研究が行われてきました。

当会の会長でもある亀崎直樹氏は西の浜だけでなく、八重山諸島のほぼ全て砂浜を調査し、南西諸島におけるウミガメ産卵地の概要を明らかにしました。この調査によって八重山諸島で保護すべき重要な砂浜が明らかになり、現在でも保護地区の設定を行う際の大変貴重な資料となっています。これらの砂浜も当研究所で継続し、定期的にモニタリング調査を行っています。

西の浜が教えてくれたこと

西の浜調査では様々なことが明らかになりました。例えば、西の浜ではタイマイの産卵と帰巣が、日本で始めて確認されました。日本でタイマイの産卵が恒常的に確認されているのは西の浜だけです。



1978年 西の浜 きのこ岩

さらにタイマイは毎年もしくは2・3年間隔で数回の産卵があることが確認されました。

西の浜にはアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種類が産卵しにくることが明らかになりましたが、これは世界的に見てもとても珍しいことです。

1980年代はアカウミガメの産卵がほとんどでしたが、1990年代ではアオウミガメの産卵数が増えてきました。これが何を意味しているのか、未だによくわかっていません。しかし大きな環境の変化を示しているのだと思います。1980年後半から1990年代で、西の浜の両端では大きく砂が減っています。これは近くの港に離岸堤が設置され、海流が変化したためです。離岸堤を作ったときは、まさか数十年後に離れた場所の砂浜に影響がでるなんて、誰も予想しなかったことです。

自然を相手にした時、たった数年間の調査や研究では、分かることはそう多くはありません。当研究所が多く成果を残せたのは、30年以上も生き残ってきたからです。

しかし現在の日本では短時間で成果を求められることが多くなってきています。競争社会と言われれば仕方がないことです。しかし、どんなにお金をつぎ込んででも短時間ではできないことがあります。時間をかけることの大切さを伝えることも、これからの黒島研究所の役割なのかもしれません。



2007年 西の浜 きのこ岩

室戸基地 とウミガメ

山崎千亜希

日本ウミガメ協議会の調査基地のひとつに、高知県室戸基地があります。ここでは2002年7月から、地元の漁業関係者の協力を得て、ウミガメの調査・研究活動を行ってきました。

室戸は、古くから捕鯨が盛んに行われ、捕鯨衰退後もカツオやマグロ漁の基地として栄えた地域でした。明治28年、室戸の漁港の一つ、椎名漁港が大敷網を取り入れたことがきっかけで、大敷網は室戸岬東海岸を中心に広がっていき、現在も重要な産業として続いています。

大敷漁業は、全長約450mにもなる大きな網を沖合約2km程の場所に配置し、魚が網に入るのを待つ定置網漁業の一種で、年間を通じて、高知特産のカツオを初め、ブリやサバ、アジなど多種多様な魚が捕れます。この網に、ウミガメが誤って入ってしまうのですが、大敷網は天井が無く、海面が開いているので、ウミガメが溺死することはほとんどありません。



大敷の操業風景

室戸での生活

私たち室戸調査基地の駐在員は、室戸市の高岡、三津、椎名漁港と室戸岬の東側を中心に調査活動を行っています。室戸では朝と昼と二回、



誤って網に入るアカウミガメ

操業するので、朝も暗いうちから起きだし、漁港まで漁師さん達を見送りに（時には乗船させてもらいに）港まで向かいます。

1～2時間ほどで船が戻ってくるので、漁師さんと一緒に、魚を選別し、その後に、漁師さんに手伝ってもらいながら、網に入ってしまったウミガメを測定します。昼にもう一度同じような作業を繰り返すのですが、漁港に行く度に、漁師さん達が面白い話をしてくれたり、珍しい魚が入ったりと、退屈することがありません。



室戸岬

室戸でのウミガメ調査

2002年7月から2006年12月までに調査したウミガメの数は1,000頭以上になり、これまでにアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、オサガメが確認されています。ここでの主な調査は、網に誤って入ってしまったウミガメの甲長・体重測定、DNAサンプル採取、採血、個体識別のための写真撮影、そして標識をつけての放流です。



専用ノギスによる測定

標識放流と衛星追跡調査

標識をつけて放流されたウミガメは、これまでに鹿児島、山口、宮崎、和歌山、三重などで再発見され、再び海へと帰されました。中には、甲長や体重などを測り再放流された個体もあり、ウミガメの回遊ルートや、どれくらいの期間で、甲羅がどれだけ成長するのかを調べるための貴重な資料になります。



衛星追跡調査の例 (NOAAとの共同研究)

日本ウミガメ協議会では衛星発信機を取り付けて、ウミガメの行動を追跡する調査も行っており、室戸からも何頭か発信機をつけて放流しています。発信機をつけることで、標識調査だけでは解らない、広い海の中を自由に泳ぎまわるウミガメたちの生態が少しずつ明らかになってきました。

漂着死体の調査

他にも、死んで海岸などに打ちあげられた個体があれば解剖を行い、ウミガメの食性や成熟についての調査を行います。



漂着したアカウミガメ

室戸基地のこれから

日本ウミガメ協議会が室戸調査基地で、ウミガメの調査・研究活動を始めて約4年の間、私達が毎日研究活動を行っているのは、室戸の漁師さんを始め、大敷組合や漁協、地域の人たちが協力してくださっているおかげです。室戸駐在員が不在のときでも、進んでウミガメの調査をしてくださっています。これからも、地域と一体になりウミガメの調査を頑張っていきたいと思っています。

第17回

日本ウミガメ会議（熊野・七里御浜会議）

報告

七里御浜へ!!

2006年11月18日(土) - 20日(月)三重県熊野市、紀宝町、御浜町で第17回日本ウミガメ会議が開催されました。

今会議の特徴は、なんと言っても海外からの参加者が多かったことです。

ご承知のように、日本で生まれたアカウミガメはメキシコ沿岸で育ち、産卵のために日本へと戻ってきます。そのため、それを保護するならば、日本と協力してやらねばということで、アメリカのNicolee J. Wallace氏やHoyt Peckham氏が、メキシコのバハ・カリフォルニア沿岸でウミガメ保護を実践し始めた漁業者を連れ、日本に呼びかけにきたのでした。

参加者の皆さんの同意を得て、協力してウミガメを守っていくこと、当会会長の亀崎が交わした握手に、惜しめない拍手が送られたことがとても印象的でした。



会議中の様子



古道の歴史を語る花尻さん

会議前には、熊野古道の語り部の代表であり、今会議の実行委員会会長でもある花尻薫さんの話を聞きながら、古道の散策を行いました。興味深いお話に皆熱心に聞き入っていました。



発表の様子

招待講演者であるMalia Angela Marcovaldi 女史の他、海外からの参加者も多数あり、国際色豊かな会議になったことも特徴的でした。



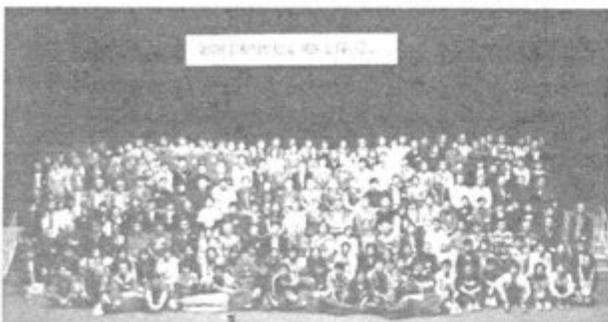
ポスター発表の様子

ウミガメに関する貴重な情報が公開され、口演26題、ポスター発表23題の合計49題の発表がありました。

*** 今会議の開催にあたり、下記の企業さまから多くのご支援をいただきました ***

この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

カネテツデリカフーズ 東洋ゴム ステラケミファ 関西電力株式会社



次の会議でお会いしましょう!

1年に1度、日本中のウミガメ屋が集まるウミガメ会議も17回目を迎えました。今回も盛会のうちに終了することができまして、ご協力いただきました関係機関、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

次のウミガメ会議は2007年11月16日(金) - 18日(日)種子島での開催です。第一回の案内をHPでも公開していますので、そちらもご確認下さい。

関西うみがめプロジェクト！ 第1弾 リバイブウミガメ戦略会議報告

神戸から始まるウミガメプロジェクト

2007年2月10日、神戸酒心館ホールで「リバイブうみがめ戦略会議」を当会主催で開催しました。会議当日は約90人が参加し、大阪湾周辺のウミガメと、それを取り巻く環境の現状を確認しながら、意見を交換しあいました。

大阪湾でも、兵庫県明石市の海岸、洲本市成ヶ島などで1960年代からアカウミガメの産卵が確認されており、2006年にも成ヶ島で足跡が確認されている他、多くのウミガメ情報をいただきました。間違いなく大阪湾にもウミガメがやってきているのです。

しかし、これまで大阪湾周辺でウミガメの調査を行ってききましたが、生きてるウミガメに会うよりも、死んでいるウミガメに出会う方が多いのです。

しかも、放流したウミガメに発信器を付けて大阪湾で放流すると4個体中3個体が何らかの事故にあったと予想されるのです。

考えれば、大阪湾や淡路島周辺では船の航行も激しいし、漁業活動も活発です。ウミガメにとってはとてつもなく危険な海なのです。とはいっても、船の航行に制限を加えるのは無理でしょうし、漁業をやめるわけにもいかないわけです。協議会内部で議論を重ね、いきついた結論は、大阪湾やその周辺でウミガメが長い間生育するのは無理ではないか。ならば、個体の保護の観点から、捕れたウミガメはそのまま放流せずに、保護してやり、適切な時期に適切な場所で放流すべきでは、という話になったのです。今回はその意見のお披露目だったわけですが、概ね好意的な反応をいただきました。

第1部では、当会の会長亀崎直樹による基調講演の他、各方面の専門家に集まっただき、大阪湾の現状や、貴重な意見をいただきました。一般参加者からも活発に質問や意見が飛び交い、大阪湾のウミガメをどうするべし議論を展開しました。

第2部は別会場で食事をしながらのディスカッション。こちらにも多くの方にご参加いただき有意義な時間を過ごすことが出来ました。参加いただいたみなさまに、改めてお礼申し上げます。



基調講演

第1部では、当会の会長亀崎直樹による基調講演「何が出来るか？ウミガメのために」の後、専門家を招いて、ディスカッションを行いました。



パネリストの皆様

向かって右から、高田利夫(大阪・堺漁協 連合会会長)、柴山信行(海洋政策研究財団調査役)、日野明德(東京大学大学院教授)、花野晃一(成ヶ島を美しくする会)、井上智夫(国交省姫路河川国道事務所)、松沢慶将(日本ウミガメ協議会) ※敬称略



会議の様子



活発な意見交換



司会の大鹿達弥

後援いただいた(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構・カネテツデリカフーズ(株)に感謝申し上げます。

News!!



■ インターネットショッピングがウミガメを救う？

購入者には一切負担がかかりません
アマゾンで商品をご購入の際は、
ぜひ当会ホームページ(<http://www.umigame.org>)から



当会ホームページ経由でご購入して頂いた場合、
商品売上の3%が当会の活動費として寄付して頂けます。

当会のホームページ（トップページもしくは、ウミガメリンク内の支援・協力ページ）にある、左のバナーから、アマゾンのページへ入って、商品を購入していただくと、商品売り上げの3%以上を当会へ寄付していただけます。（アフィリエイト形式）

ウミガメ関連以外の商品（CD、DVD、書籍など）でも、当会へ寄付されますので、アマゾンで商品ご購入をお考えの際には、ぜひ、当会のホームページよりお買い求め下さい。

アフィリエイトって？

アフィリエイト(affiliate) = 加盟する、提携する

アフィリエイトとは、企業やお店と提携して、ホームページに広告を置いて、商品やサービスの紹介をすることをいいます。

その広告費として、商品の売上金の一部を企業やお店が負担するという仕組みになっています。

報酬分を上乗せし、価格が高くなるのでは？と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、そんなことはありません。当会ホームページ経由で購入しても、サイト上から購入しても値段は変わらず、購入者には、一切負担がかかりません。

グッズ紹介



□ Sea Turtle Supporters Shopより取り扱い商品のご案内



オリジナル携帯ストラップ(各種) 630円(1個)



オリジナルピンバッジ(各種) 525円(1個)



オリジナル手拭い(子ガメ) 525円(1枚)

青色に加え、赤色もできました。

*送料は別料金です。

*価格は消費税が含まれた総額表示となっております。

*売上金は、ウミガメの研究と保護のために使われます。



グッズ販売店募集

事務局では、当会で取り扱っているグッズを販売して下さるお店を募集しています。

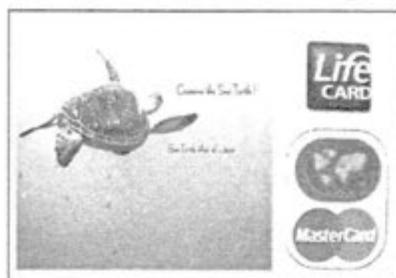
ウミガメグッズを皆さんのお店に置いていただけませんか？

グッズの売り上げは、ウミガメの調査・研究・保護のために使われます。

お問い合わせは日本ウミガメ協議会事務局・仲村まで。



ウミガメの保護ができるクレジットカード



このカードは、国内・海外のライフカード及びマスターカード加盟店で、ご利用いただけます。

日本ウミガメ協議会オリジナルデザインの 募金型クレジットカード登場

先号で紹介させていただきました、ウミガメクレジットカードが、各地で話題になっており、たくさんのお問い合わせと、お申し込みをいただきました。お申し込みいただきました皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

このカードでお買い物していただいた売上金の一部は、ウミガメの調査・研究・保護活動の為に当会に寄付されます。

入会金・年会費等は一切かかりませんので、ウミガメの為に是非、お申し込み下さい。

事務局の主な動き

(2007年8月～2007年2月末まで)

- 8月12-22日 グループトルトガス、プロペニンストラ主催のウミガメ調査に参加
- 8月14日 室戸海洋深層水フェスタに参加
- 8月22-25日 第2回Pacific-Atlantic Sea Turtle Assessment Meeting (PASTA-II) に参加
- 8月末日 西表にて潜水調査
- 9月19日 淡路島へ混獲されたウミガメの標識放流
- 9月23日 「明日の海岸を考えるシンポジウムin近畿」にて基調講演「ウミガメの浜を目指して」
- 9月25日 淡路島へ混獲されたウミガメの標識放流
- 9月26日 淡路島へアカウミガメの漂着死体調査
- 9月27日 淡路島へ混獲されたウミガメの標識放流
- 10月20-21日 日本は虫両棲類学会に参加
- 10月22日 島根海洋館アクアスにて日本海で死亡したアカウミガメの解剖
- 10月27日 東レ漁網会講演
- 10月29日 環境省生物多様性センター主催「モニタリングサイト1000シンポジウム」に参加
- 11月18-22日 第17回日本ウミガメ会議(熊野・七里御浜会議)開催
- 12月02日 徳島 平成18年身近な自然一斉調査
第二回講座「アカウミガメ調査報告会」参加
- 12月04日 生物多様性国家戦略の見直しに関する懇談会にて「ウミガメ類の保全と日本の立場」講演
- 12月12日 H×H主催須磨海岸のビーチクリーン作戦に参加
- 12月25日 人工衛星をつけたアオウミガメの放流
- 1月20日 成ヶ島のビーチクリーン作戦に参加
- 2月08日 アオウミガメの産卵
- 2月10日 「リバイヴウミガメ戦略会議」開催
- 2月20-22日 渚とウミガメ研究会徳島と協同で、阿南市内の小学校で出前講座

ご寄付を頂いた方々

梅原奈枝 大間知俊彦 大牟田一美 岡本洲弘 片岡真理子 株式会社みや
 上村康幸 亀崎長生 紀伊半島ウミガメ情報交換会 串本海中公園センター
 小島あずさ 後藤清 米須邦雄 斎藤充 境温哉 立川浩之 立川佳晴
 新島赤海亀会 西川一喜 布藤正子 端田宏子 深川沙央里 藤井隆司
 堀越和夫 松平和子 宮平秀幸 山中宏子 吉川信博

(順不同・敬称略) 2006年7月31日～2007年2月28日まで

平成18年度 日本ウミガメ協議会会計報告

平成17年10月1日より平成18年9月30日まで

単位：千円

収入の部

会費	1,841
助成金・補助金・事業委託費	49,770
ウミガメ会議参加費・協賛金	5,920
寄付金	1,212
その他収入	206
収入の部合計	58,949

支出の部

自然環境保全事業(調査・研究)	20,696
小笠原海洋センター運営事業	1,018
黒島研究所運営事業	7,810
ウミガメ会議開催費	4,001
情報提供事業(速報・会報)	949
管理費(人件費・事務所経費等)	24,948
支出の部合計	59,422

当期収支差額 473

前期繰越収支差額 8,081

次期繰越収支差額 7,608

各費目のうち、主なものは次のとおりです。

助成金・補助金収入

三井物産	2,200
大阪コミュニティー財団	1,000
セブン・イレブンみどりの募金	1,110
(財)兵庫環境創造協会	174
世界自然保護基金ジャパン	1,600
東京都小笠原補助金	1,527

事業委託費収入

環境省モニタリング事業	9,000
環境省ウミガメ行動追跡調査	6,489
国土環境(株)竹富町委託事業	1,500
近畿地方整備局費	950
徳島県然環境協力員養成事業	699
明石市ウミガメ行動追跡事業	420

STSmembers募集中

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。

日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非、入会をお誘い下さい。

携帯電話用ウミガメステッカーの配布

当会では、少しでも多くのウミガメの情報を得るために、当会の連絡先がプリントされた携帯電話用ウミガメステッカーを配布しています。

もし、海岸や海でウミガメの産卵や死体を見つけた時は、これを見て協議会にお電話下さい。

ステッカーを貼って下さる方、お友達に配っていただける方は、必要枚数をご記入の上、80円切手を貼った返信用封筒をお送り下さい。

皆様のご協力をお願いします。



携帯用ステッカー

編集後記

冷たかった風もいつのまにかどこへやら。ふと気がつくと、あちこちで桜の花が咲いています。高知からの帰り、夜通し大阪に向かって帰る途中のことです。休憩に立ち寄った高速のサービスエリアの片隅で、ライトアップされている桜を見かけました。日本には変種をあわせると100種以上の桜が自生しているそうですが、そこに植えられていた桜はソメイヨシノでした。都会ではソメイヨシノ以外を見かけることはあまり無いように思います。

遅い時間だったため人影もなく、桜を独占してちょっとしたお花見になったわけです。桜に宿るとされる神、木花開耶姫命(コノハナサクヤヒメ)は、美しさと儂さの象徴でもあります。地域によって酒造の神様とも呼ばれているそうです。観賞用に作られたソメイヨシノにも神様が宿るのかはわかりませんが、ヤマザクラからソメイヨシノへと花見の対象が変わっても、桜を愛でながらお酒を飲むことには変わりはないようです。

桜の季節が終われば、まもなく産卵シーズンの始まりです。長い夏に備えて、少しの間、桜の花の季節を楽しむのも良いものです。

編集担当: 仲村 貴生

マリンタートラー (日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2007年4月15日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
電話: 072-864-0335 FAX: 072-864-0535
URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org